

2 論の組み立て：論述の積み上げ

2.1 論文・レポート課題の基本型

論文やレポートの課題には、いくつかの型がある。たとえば戸田山（2002:54）は、次の2×2のタイプに類型化している。

- (i) 報告型の課題
 - (a) 読んで報告するタイプ
 - (b) 調べて報告するタイプ
- (ii) 論証型の課題
 - (a) 問題が与えられた上で論じるタイプ
 - (b) 問題を自分で立てて論じるタイプ

(出典：戸田山和久『論文の教室』NHK出版協会、2002)

たしかに報告型と論証型とでは、論の組み立て方や執筆における作業の優先順位が異なる。論としての基本はおなじであっても、報告型であれば、事実関係の収集と整理に重点が置かれる。論証型であれば、問題を明確に提起することが重要であり、問題提起を中心に現状分析や仮説の設定などを試行錯誤する。したがって、論文やレポートを執筆するときの構成も異なってくる。

構成を検討するうえでは、報告型と論証型の二分類が基本である。戸田山が示した細分化のレベルは、論の組み立て方には無関係である。これは演習などでの課題の種類に対応したものだ。

他方、論証型は論述を積み上げるタイプと意見の対比のなかで根拠を示すタイプとに分類できる。論述の積み上げとは、事実や分析をひとつひとつ積み重ねて主張を裏付けるものである。それに対し、意見の対比タイプは対立する主張や支配的な主張、暴論・極論などのなかに自分の主張を位置づけ、自説の正当性を浮かび上がらせていく形式だ。論を組み立てる以上、「問い」と「答え」の反復を繰り返す点はおなじだが、論文やレポートの具体的な構成を考える段階では、タイプによって異なってくる。

論の組み立てという視点からは、論文やレポートは次の三つに類型化できる。

- (i) 論証型：論述の積み上げ
- (ii) 論証型：意見の対比
- (iii) 報告型

ただし、実際に論文などを執筆するときには、これらのタイプのどれか一つで決着がつくわけではない。あるパートでは意見の対比をおこなう必要があるだろうし、そのなかのサブパートのいくつかは報告型の展開が必要になるかもしれない。大きな論を組み立てるときは、これらのタイプを重層的に組み合わせる必要がある。ここに示したタイプは、あくまでも基本型として覚えておくべき型である。

以下、この基本型を示してみよう。

2.2 論述の基本4パート

なにかを論じるときの基本は、設定した問題に論証を加えて結論に導くことである。これは論文であろうと報告書であろうとおなじだ。章立てによって細かな構成に違いが出てくることはある。しかし、その基本線にかわりはない。問題設定の明確さ、検証の的確さが論の構成には不可欠だ。

どのようなテーマであれ、論の内容は次の4つのパートで構成される。

- 現状分析：問題を取りまく背景と現状
- 問題提起：設定された問題の詳細
- 主張：証明すべき主張（仮説）とその根拠
- 総括：論の総括と意見

現状分析と問題提起によって論ずべき問題を明確に設定する。問題提起とはすなわち、テーマに関して論者が注目する問題点を示すことにほかならない。しかし、なにかが問題であるのかを示すには、現

状の批判的な分析が不可欠である。逆に、提起する問題があってはじめて、現状分析をするべき対象が決まる。現状分析と問題提起とは一組のものであり、実際の執筆作業では、両者のあいだを行きつ戻りつしながら作文することになる。

主張パートでは、提起された問題に対する執筆者の主張を論証する。もちろん論者の一方的な主張のみを書き連ねても、読み手に対してなんの説得力も持たない。論を成り立たせるためには、主張に対する根拠を論理的に示さなければならない。

総括パートでは、それまでの総括として現状と問題をまとめ、自分の主張を再確認する。この部分では、あたらしい事実や分析を加える必要はない。主張の裏付けは、前のパートで終わらせておくのが基本だ。結論部分で述べることは、主張の意義、場合によっては自分の主張だけでは解決しきれない課題、今後取り組むべき事柄などである。総括パートの最大の役割は、主張の意義や位置づけを明確に評価することだ。

2.3 パラグラフ構成との対応

構成がきちんと練られた小論文は4パラグラフとなる。一つのパラグラフには一つの役割があり、論が4つのパートで構成されているのであるから、各パートごとにパラグラフを立てるのが基本だ。つまり、現状分析、問題提起、主張、総括を示すTSが小論文の土台となる。

ここで例をひとつ示してみよう。論ずべき事柄の背景として、お腹がすいて仕方がなく、いまずぐにでも食事を取りたい状態なのに、出席しなければならない授業が始まってしまった、という状況があったとする。この問題背景に対し、腹が減ったのなら食事を取ることを優先させるべきだという主張をしたい、と仮定する。背景と主張、基本構成に対応するTSはp.6に示したようになる。

*

小論文の場合、基本構成を提示する順番を意図的に変更することが可能だ。基本はあくまでも(i)現状分析から(iv)総括の流れに沿った展開である。しかし、みずからの主張を強調したい場合、(iii)主張→(i)現状分析→(ii)問題提起→(iv)総括という順番も可能である。とりわけ逆説的な事柄を主張したいときは、主張を先に出したほうが読み手の関心を引けるだろう。また、その際に現状分析と問題提起を一体化し、主張パートの分量を増やすこともできるだろう。構造さえ明確に築かれていれば、文章表現面では多少の工夫が許されるのである。

2.4 論文への展開

論文の基本構成は序論・本論・結論である。実際の章立てはテーマによっても執筆者の方針によっても異なってくるが、大枠はこの3パートで構成されるのが基本だ。この構成は論文一般に適用される書式なのである。

論の基本4パートとの対応は次のとおりだ。

序論：現状分析・問題提起、主張の概略
本論：現状分析、問題提起、主張の詳細
結論：総括

論文の書き方の詳細は、別の項目であらためて述べることにする。とりあえずこの時点では、小論文の構成はそのまま論文にも適用できること、そして序論がそのまま小論文形式で記述できることを知っておこう。

(この回おわり)

パラグラフの構成例

背景：空腹状態なのに授業が始まってしまった。

主張：授業を抜け出してでも食事に行くべきである。

ここから現状分析→問題提起→主張の流れを考える。腹が減ったという現状のもと、食事に行きたくても行けないという問題が存在し、それに対して授業を抜け出してでも食事に行くべきである、と主張する展開が考えられる。最後は即断即決が重要という評価で締めくくってみよう。

基本構成ごとの TS

【現状分析】腹が減った

【問題提起】いまは食事に行きたくても行けない

【 主張 】 授業を抜け出して食事をとりに行くべきだ

【 総括 】 悩んで時間を無駄にするよりも即断即決が重要だ

このように作成された TS をもとにパラグラフを仕上げる。TS に対応する C、TS を補強する補足説明や理由などを列記し、論旨を精密化すると、次のような「原案」ができあがる。

■腹が減った (TS)

・朝から何も食べていない (SS：理由)

・腹がグーグー鳴っている (SS：捕捉説明)

→いますぐにでも何か食べたい (C)

■いまは食事に行きたくても行けない (TS)

・授業に出席しないといけない (SS：理由)

・授業中にモノを食べるのは禁止されている (SS：理由)

→このままでは空腹はいやされない (C)

■授業を抜け出して食事をとりに行くべきだ (TS)

・空腹のままでは集中して授業を受けられない (SS：理由)

・さいわい、授業中に抜け出すことは簡単だ (SS：理由)

・早く行くほど早く教室に戻れる (SS：理由)

→食事を終えたら教室に戻ればいいではないか (C)

■悩んで時間を無駄にするよりも即断即決が重要だ。(TS)

・行くかどうか悩むのは問題の先送りにすぎない (SS：理由)

→しょせん、人間は食欲には勝てないものである (C)

【演習問題 2】 p.3 に示した演習問題 1 を用い、背景・主張、TS を考えてみよ。